

## 平成29年度事業（継続）の審査結果コメント案

### ● 18歳で就職自立を目指す若者への就労支援

（（特非）フェアスタートサポート） 佐藤委員

活動で大きな成果をあげて、その成果を分かりやすく提示しているところは、他のボランティア団体の見本になるものなので、今後もこの調子で続けていただきたいです。

定時制高校へのアプローチで、さらなる需要が予想され、又、御団体が行っている活動の先駆性を考えると、今後は他県からも依頼が多く入るようになることが想定されます。その際に、まず必要となるのは人的リソースです。是非、この素晴らしい活動を全国に広げていけるように、スタッフの増員と、技術やノウハウの継承を期待しています。

最後に、前回も同様のコメントをいたしました。御団体のウェブサイトにある「支援を受けた若者からの喜びの声」をさらに増やしていき、支援を必要としている人のところへ確実に届き、インパクトを与えて支援につなげていくことを、私たちは大変期待しております。

### ● アルクヒューマンサポートセンター・アルク相談事業

（（特非）市民の会 寿アルク） 徳永委員

「市民の会寿アルク」が長年取組まれてきた活動は、経済格差、高齢化、社会的孤立といった社会の課題が深刻化する中で益々重要性を高めていると思われます。四半世紀近い活動の実績をふまえて、さらに相談事業の拡充という新しい挑戦に、基金21としても大いに期待して補助金を交付します。

事業の3年目を迎え、補助金終了後の対象事業の継続に向けて、活動の充実に加えて、団体としての組織基盤の強化に取り組んで下さい。

具体的には、まず、積極的な広報活動によって社会とのコミュニケーションをはかり、相談窓口の存在を知り回復への最初の扉を叩く相談者の増加と、団体の活動を支える支援者の拡大に努めてください。支援者拡大のためには、既存の支援者に加えて新規の支援者を獲得する必要があるため、そのためには、活動の成果の「見える化」も求められるでしょう。

また、長年の活動実績に基づく団体内の人材育成過程のモデル化によって、相談事業の担い手が増えることにも期待します。同時に、地域の他の組織や民生委員などとの連携によって、相談者が回復に向けて適切な社会的支援を受けられるような仕組みづくりにも期待します。（480文字）

## ● 小中学生向け ロボット・ワークショップ事業

( (特非) ロボロボ・Club ) 服部委員

ロボット教室は、民間営利企業による開催もありますが、ロボロボ・CLUB の昨年度申請事業は、2つの点で期待されるものでした。1つは、大学生が子どもたちに教えることで大学生自身の成長がみられ、彼らの育成につながることで、また、申請書「事業1」に「経済的余裕が無い家庭の子にも、科学への興味や未来の夢を持つ機会を増やす。」とお書きいただいた通り、多様な子どもたちへの配慮があったことです。これらの点が採択理由であることは、昨年採択発表時にお示しした通りです。

しかしながら、残念なことに、今回のプレゼンテーションから経済的余裕が無い家庭の子どもたちの参加を積極的に促していませんでした。

他方、次年度の申請に際して、プレゼンテーションの資料にはこの観点が盛り込まれていました。経済的困難を伴う子どもたちへの学習支援を行っている団体を通して、そこに集まる子どもたちに招待状を送るということでした。

しかしながら、その方法で本当に子どもたちは来てくれるのか、交通費はどうするのか、団体や担当する大学生はそのような子どもたちの触れ合いに経験があるのか、そして、ワークショップに参加した後のフォローについても課題がみられ、残念ながらプログラム開催にあたって工夫が伝わってきませんでした。

このような理由から、次年度の採択を見送らざるを得ませんでした。

しかしながら、ロボット・プログラミング出張教室は独自に事業化ができるようになったこと、夏休みのワークショップに予定以上の子どもたちが集まり好評であったことに、審査会は一定の評価をしています。今後も、みなさんの活動によって、より多くの子どもたちに感動を与えてくださることを心から願っています。

## ● 事業名：高校図書館内居場所カフェ事業

( (特非) パノラマ ) 長坂委員

家庭環境等にさまざまな課題をかかえている生徒たちが、高校の図書館というオープンな場所で、飲み物やお菓子をつまみながら生徒たちが交流し、大人と会話し、自然な形で生徒の悩み相談につながっていくというこの事業は、新しい取り組みとして注目も高まっています。

参加する生徒も多く、相談数も増えていること、大人のボランティア参加や、他校への波及が起こっていることなど、成果もあり、今後ともその展開が期待されています。

課題として、ボランティアの募集体制や事前研修の問題、スタッフの体制の継続性と育成などが指摘されますが、これら課題解決を含め、次年度は対象校が1校増えることもあり、実施体制の強化にしっかりと取り組んでいただきたいと思います。

さらに今後の展開として、もう1校での実施、他校（多校）へのノウハウ移転、自立的・継続的取り組みへとつなげていくことなどを踏まえ、全国に波及する「かながわモデル」のモデルとして機能していくものにつくり上げていくよう大いに期待しています。